

同時に、どうせ當時の役人達には讀めもしなければ區別もつかない滿文老檔も寫眞してしまふことにしやうではないかといふ策であつた。計畫はうまく圖に當つて、辭書の寫眞を許すといふことになつたが、實は先方でも大概は感づいて居つたらしい。たゞ表面辭書の寫眞といふことであれば、うるさい物議を生じなくて済むと見て、そこは博士と相識の間柄であつた趙氏の老巧妙腕で、一切老檔の名には觸れないで、含蓄ある處置を取つてくれたものと思ふ。何れにしてもこの談判の面倒さと苦心とは一通りではなかつた。さて愈々寫眞に着手する段になると、五體清文鑑五千何百枚、老檔四千何百枚、合して一萬を越える數で、僅の日子中に寫し了ることは容易の業でない。當時奉天に二三の邦人寫眞師はあつたが、かゝる多數の寫眞撮影には經驗無く、第一に種板が揃はない。加ふるに書物は宮殿内から外に持出すことを許されぬので、設備萬端の不自由も伴ひ、何れも尻込みして引受けない。そこで遂に東亞同文書院の出身で近く此の地に寫眞業を開いたといふ南洞孝氏に依頼し、同氏の寫眞機と、吾々の攜行した寫眞機との二臺を宮殿内に据えつけ、南洞氏とその助手及び博士と余との四人で撮影を遂行することに定め、一方大連及び内地に電報して急に寫眞乾板を輸入するといふやうな騒ぎを演じたのであつた。かくいへば萬端割合に簡単に運んだやうであるが、實はその間面倒と困難とを極めたもので、寫眞機を据え付けても、宮殿内には乾板を取替る暗室がない。そこで辻々の巡查の交番塔から考案した暗室を急造して宮殿内に持込み、乾板取替役に廻るのは、一日中この中に立て籠ることにした。老檔には頁附けがないので、頁數を打つた紙片を作つて、これを撮影の際、毎紙に挿み込む役が要る。ところでこれは多少とも滿文が讀めなければ、何天子の部の何枚としてよいか分らないので、これには博士か余かの何れかゞ當らねばならぬ。一方撮影したものは、原則として其の夜中に現像し